View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Konan University Repository

KONAN UNIVERSITY

＜資料紹介＞アントニオ・ジェノヴェージの七段階発展論

著者	奥田 敬
雑誌名	甲南経済学論集
巻	54
号	3・4
ページ	171-193
発行年	2014-03-25
URL	http://doi.org/10.14990/00001497

甲南経済学論集第54巻第３・４号　2014年３月

〔資料紹介〕

アントニオ・ジェノヴェージの七段階発展論

奥　田　　敬

序言

１．以下に翻訳・紹介を試みるのは，経済学教科書の嚆矢にも数えられるアントニオ・ジェノヴェージ（1713-1769）の『商業すなわち市民の経済の講義』（初版1765-67年，増補第二版1768-70年）の第１巻第７章「栄養について，まず勤労一般について」の全文である。その最終第８節は拙稿「啓蒙の南限―ジェノヴェージ〈市民の経済〉の形成―」（佐々木武・田中秀夫編『啓蒙と社会―文明観の変容』，京都大学学術出版会，2011年）の348-349頁に訳出・引用したことがある。気づいたかぎりの不備は訂正したが，部分的に同稿と重複する記述を避けきれなかったことをお許しいただきたい。

本誌第45巻１号と２号（2004年）に分載した拙稿「高貴な実学－アントニオ・ジェノヴェージにおける〈経済学〉の初心－」の（下）の注74で，わたくしはジェノヴェージに（さえ？）見受けられる「ヨーロッパ中心主義」への懸念を記した。本稿は，その検討へ向けての参考資料でもある。

２．いわゆる大航海時代によってヨーロッパ人の地理的視野が拡大し，世界各地から集積された膨大な民族誌的知見を踏まえて，啓蒙の時代には人類の歴史をその生活様式の変遷に即して推測的に再構成する経済的な発展段階論が登場したこと，それがまた翻っては，「商業の世紀」と呼ばれた新しい時

代の「新しい学」としての経済学の誕生を促したことは，1762年の『法学講義』（Ａノート）と1776年刊の『国富論』を貫く通奏低音となったアダム・スミス（1723-1790）の「四段階論」が典型的に示すところである。だが，先進イングランドに隣接し1707年の合邦によってその経済圏に包摂されたスコットランドに生まれたスミスが，まさにそのゆえに「公平な観察者」の冷静な立場から「重商主義」の全面批判に着手したのとほぼ同じ頃，はるか僻遠の南イタリアの地では1734年の独立によって回復された「祖国」の後進性の克服のために，イングランドの経済史と経済政策に範をとり「勤労」を軸とした国民経済を創出するための処方が，1754年に王立ナポリ大学に創設された「最初の経済学講座」から説かれていた。

この『商業すなわち市民の経済の講義』（以下『講義』と略記）の成立史と構成，その思想史的な位置づけなどについては，すでに上掲拙稿「啓蒙の南限」で概述したので，ぜひご併読を願いたい。また，そこでも前口上風に言及したが，スコットランドとナポリでの経済学の同時発生についてはロバートソン（Robertson, John, *The Case for the Enlightenment. Scotland and Naples 1680-1760,* Cambridge U.P., 2005）が，スミスとジェノヴェージの対比についてはブルーニ（Bruni, Luigino, *Civil Happiness. Economics and human flourishing in historical perspective,* London: Routledge, 2006）が，やや極論ぎみながらも啓発的な問題提起をおこなっている。さらに最近ではライネルト（Reinert, A. Sophus, *Translating Empire. Emulation and the Origins of Political Economy,* Harvard U.P., 2011）が，『講義』の母胎となったジェノヴェージ編訳著『大ブリテン商業史』（1757-58年刊）も重要な一環を担った18世紀における国際的な経済思想の交流と対抗を如実に描きだしている。

３．ジェノヴェージは『講義』第１巻「序文」で《歴史が我々に教えるところでは，市民法は，野生人 *Selvaggi* のもとでは全く存在せず，牧畜民 pastori のもとでは若干存在し，農耕民 coltivatori のもとでは更に多くなり，商業的

国民 popoli negozianti のもとでは無数になる》と述べ，第３章「市民体 **Corpi Civili** を構成する個々人と家族のさまざまな階級 **classi** について」２節では，《今日地上にある政治体 corpi politici が一般に分けられている，人々の諸階級を知るためには，人類のいわば種子から始めて，放浪する野生 selvagge vaganti，定住した野蛮 barbare stabili，文化的で非商業的 culte non commercianti，文化的で商業的 culte commercianti というように，「諸国民 Nazioni」を分けねばならない》と予告していた。その敷衍のための導入的な見取り図を提示したのが第７章の「七段階論」なのだが，これは一見するとスミスの「狩猟」「牧畜」「農業」「商業」の四段階に「冶金」「製造業」「学芸」の三段階を組み込み，いたずらに煩瑣にしただけのように思われるかもしれない。だが，公表はジェノヴェージが先であるし，ヒュームやギボンの研究でも著名なイタリアの思想史研究の泰斗ジャッリッツォは，《ジェノヴェージがスミスの典拠？》と茶化したこともあるが（AA.VV., *Giuseppe Maria Galanti nella cultura del Settecento meridionale,* Napoli: Guida, 1984, p.71），この二人の同時代人のあいだには，互いの存在を仄聞していた痕跡すら今のところ確認されていない。スミスは四段階で過不足なかったが，スミスには自明な現実が，ジェノヴェージには遼遠な理想であった，ということであろう。

『講義』第１巻第２章が「個人ならびに政治体の主要な動因。諸技芸と諸科学の第一の源泉」と題されているように（ちなみに，「主要な動因 principio motore」とは，６節で《苦痛 dolore を癒やすこと soddisfare と，それに共感すること compiacere》としての「関心 *interesse*」にほかならぬとされている），また，直前の第６章が「教育について」であるように，ジェノヴェージの「七段階論」の眼目と真骨頂は最終段階の「学芸」にある。それは古典ギリシア以来の「市民」像とそれを支える体制化した学問（リベラル・アーツ）への根本的な異議申し立てであった。『講義』第１巻第11章は

「機械的技芸に従事しない人々の階級について *Delle classi degli uomini non esercitanti arti meccaniche*」と題されているが，この「機械的技芸」とは，原義に即すれば，これまで卑賤視されてきた肉体労働的な諸技芸にほかならず，ほとんど生産的な労働と同義である。実際，ジェノヴェージも続く第12章の標題で「不生産的な階級を可能なかぎり最小とする法は，どのようにして実行できるであろうか」と問いかけている。その階級とは，軍人・法律家（官僚）・医者・聖職者・商人・地主（貴族）の六つである―そして第12章では，「貧民および浮浪者の就業について *Dell'impiego de' poveri, e de' vagabondi*」というさらなる難題が加わる―。「神学」「法学」「医学」という中世以来の大学の三つの専門学部と，その教養課程として自由学芸七科を必須としてきた「哲学」の命数は尽きようとしている。だが，それに替わるべき〈実学 Meccanica〉と，その中核となる〈互恵 Commercio〉の学も未成熟である。その骨子を先取りしようとしたのがジェノヴェージの「勤労」論であり，その舞台設定を務めたのが「七段階論」であったといえよう。

なお，この第７章の標題は，初版では「勤労一般について *Dell' Industria in generale*」であったが，第二版ではなぜか《*Della Nutrizione, e prima*》と加筆されている。前掲拙稿「啓蒙の南限」では「生計」と意訳したが，『講義』第１巻第１章から第４章もやはり「市民体」論であることから，今回はホッブズ『リヴァイアサン』第２部第24章「コモン-ウェルスの栄養および生殖について *Of the* NUTRITION, *and* PROCREATION *of a Common-wealth*」を連想させる「栄養」と直訳した。ジェノヴェージがホッブズに明示的に言及するのは，主に『市民論』を対象として，その「自然状態＝戦争状態」に異論を唱える場合がほとんどなのだが，存外こういうところで知らぬまに影響されたのではなかろうか。

４．ジェノヴェージは，『講義』と並行して執筆された倫理学上の主著『ディチェオジーナ，すなわち正義と高潔の哲学』（初版1766-71年，増補改訂版

1777年）の第２巻第１章23節でも，キケロが「技芸 arti」を《「紳士 Gentiluomo」に適した自由なもの *liberali*》と《「奴隷たち Schiavi」にのみ相応しい卑賤なもの *servili*》に二分したことを批判し，《彼ほどの「哲学者 Filosofo」がこんな大間違いを口にできるとは信じられようか？「自然 Natura」は紳士たちも奴隷たちも生まない。人間たち uomini を生むのだ。だから自然の権利において，すべての技芸は自由なのである》（*Della Diceosina o sia della filosofia del giusto e dell'onesto,* introduzione e testo a cura di Niccolò Guasti, presentazione di Vincenzo Ferrone, Venezia: Centro di Studi sull'Illuminismo europeo "G. Stiffoni", 2008, p. 186）と喝破している――拙稿「高貴な実学」（上）82-83頁も参照――。イタリア啓蒙研究の第一人者であるフェッローネは，ジェノヴェージを《ナポリで初めて，人間の諸権利を新しい「道徳の科学 science of morality」の中心に据えた》（Ferrone, Vincenzo, *The Politics of Enlightenment. Constitutionalism, Republicanism, and the Rights of Man in Gaetano Filangieri,* Translated by Sophus A. Reinert, London-New York-Delhi: Anthem Press, 2012, p. 82）と称揚しているのだが，「彼ほどの……」という不審は残念ながらジェノヴェージ当人に対してもまた向けられねばならない。彼の著作にも今日の人権意識に照らせば不適切な語彙や表現が散見されるが，この『講義』第１巻第７章では特にそうした言辞が連なっている。その最たるものが増補第二版でわざわざ２節に追加された【原注２】であり，訳出を躊躇したほどの人種的・ジェンダー的な偏見が露骨に表明されている。ジェノヴェージのいう「人間」も結局はヨーロッパ人男性に過ぎぬのかと嘆息せざるをえない。

だが，それでもあえてジェノヴェージのために弁疏するならば，当時ロンドンとパリに次いで人口40万を超えていたナポリは，彼には「アフリカ」に囲まれた都市と映じていたらしい。《彼ら［かの麗しい丘の住民たち abitanti di quei beati colli］は怠惰 poltroni で無配慮 non curanti であり，わたくしは，

優雅さと高貴さと偉大さにおいて，最高に文明化したヨーロッパ cultissima Europa の四大都市の一つのこれほど近くでホッテントットを見たかと思ったほどです》とジェノヴェージは1753年の私信に記している（拙稿「高貴な実学」（下），81頁，注75参照）。それはいやがうえにも《我々はずっとヨーロッパの最後尾に残るのだろうか》（1754年の『学問と科学の真の目標についての叙説』の一節，同上，68頁参照）という焦慮を掻きたてたに違いない。あまつさえ「悪魔の住む天国」と異名をとったナポリには，スペイン支配下の16～17世紀に「文明化」の先鋭たるイエズス会の世界宣教のための訓練基地とされた過去があった（Selwyn, Jennifer D., *A Paradise Inhabited by Devils. The Jesuits' Civilizing Mission in Early Modern Naples,* Aldershot-Burlington: Ashgate, 2004）。

もちろん，どのような理由があろうとも，このような差別の連鎖や転嫁は断じて正当化できない。ただ，わたくしは，〈高貴な実学〉がまさに〈啓蒙の南限〉の所産であったという歴史の暗部から眼を逸らせることなく，これからも〈経済学の形成〉の人類史的な意味を問い続けたいと思う。本稿には，いかなる偏見も差別も，容認，ましてや助長する意図は微塵もないことをご了解いただければ幸いである。

凡例

・底本には増補第二版（DELLE / LEZIONI / DI COMMERCIO / O SIA / D' ECONOMIA CIVILE / Da leggersi nella Cattedra Interiana / *DELL' AB.* / GENOVESI / REGIO CATTEDRATICO / *PARTE PRIMA* / PER IL PRIMO SEMESTRE. / Secconda Edizione Napoletana. / Fregio / IN NAPOLI MDCCLXVIII. / NELLA STAMPERIA SIMONIANA. / *Con autorità de' Superiori.*）を用い，初版（DELLE / LEZIONI / DI COMMERCIO / O SIA / D'ECONOMIA CIVILE / Da leggersi nella Cattedra Interiana / *DELL' AB.* / GENOVESI / REGIO

CATTEDRATICO / *PARTE PRIMA* / Pel primo Semestre. / Fregio / IN NAPOLI MDCCLXV. / APPRESSO I FRATELLI SIMONE / *Con autorità de' Superiori.*）と校合した。

・原書の節は§.Ⅰ.～§.Ⅷ.と表記されているが，訳文ではローマ数字だけにとどめた。

・原書では，ジェノヴェージの【原注】は頁ごとにアルファベットで(a)(b)(c)…と表示されて脚注になっているが，訳文では節ごとに算用数字に直してその後にまとめた。

・増補第二版で加筆・修正された部分は下線で示した。

・初版から削除された部分は山括弧〈〉で示した。したがって，初版から増補第二版への修正は，〈修正前→〉修正後のように表示される。

・固有名詞以外で頭文字が大文字となっている単語は鉤括弧「」で示した。

・イタリック体の部分は二重山括弧《》で示した。

・訳者による補足部分はブラケット［］で示した。

・訳注の作成にあたっては，ペルナ編の校訂版（Genovesi, Antonio, *Delle lezioni di commercio o sia di economia civile con Elementi di commercio,* a cura di Maria Luisa Perna, Napoli: Istituto Italiano per gli Studi Filosofici, 2005）の詳細な文献注から裨益されるところが多大であった。今回はジェノヴェージが言及している膨大な民族誌や旅行記の原典に当たることはできなかったが，この校訂版の注で典拠箇所の頁が掲げられている場合には，参考までにそのまま転載して［Perna］と標記した。20年がかりのこの労作に，あらためて深甚なる敬意と感謝の念を捧げる。

（本稿は平成23～25年度文部科学省科学研究費補助金・基盤研究（A）「野蛮と啓蒙―経済思想史からの接近」による研究成果の一部である。）

第７章　《「栄養」について，まず「勤労」一般について》

Ⅰ.「諸民族 Nazioni」の最初の粗野 rozza〈で野生の selvaggia→〉な時代を支えた，そして今なお現在の野生人たち selvaggi を支えている〈最初の〉諸技芸 arti は，「狩猟 Caccia」と河川または海岸での「漁猟 Pesca」，そして〈なぜかはしらぬが→〉おそらく再生した世界 rinascente mondo の最初の時代[(1)]には「大地 **Terra**」とそこから得られるあらゆる財貨は共有財産 patrimonio comune としか見なされなかったため[(2)]であろうか，アリストテレス[(3)]も事物の所有権 dominio を取得する正当な手段としている「略奪 Ladronecci」であった**【原注１】**。この最初の未開時代 tempi salvatici には，狩猟で殺した動物の肉や漁猟の獲物と技芸なしに生じた［天然の］草や実が人間の食料として役立ち，皮が衣料として用いられたのである。これがすべての民族 popoli の最初の状態であった。これは今日でも，グリーンランド人や「北方 Settentrionali」と「南方 Australi」のアメリカ人，ラップ人やサモイェード人，またアフリカ人の大部分や多くのその他の民族の生活である**【原注２】**。グリーンランド人は，海獣やその他の大型の魚類から，食料となり燃料となる油を得ている。そこから皮や内臓膜をとり，それだけが身に纏う衣類となる。「北方 Settentrione」では鹿の一種である「トナカイ Renni」が豊富で，食料となるだけでなく輸送手段をも，ラップ人とサモイェード人に提供する。「南方 Australi」の土地の住民のうちには，野生の果実や動物の生肉や牡蠣や蛞蝓といったものだけで生きている者もいる。イエズス会士たちが「宣教 Missioni」した当初のカリフォルニア人たちも同様であった。火の使用さえ知らない民族もたくさんいるのだ**【原注３】**。「野生人」たちは「自然 Natura」によって欲求 bisogni を制約されているが，それでも欲求のために働く。「自然」は多くを求めないので，「野生人」たちはあまり働かない**【原注４】**。生活を困難にしたのは文明人 popoli colti である。

【原注１】オデュッセウスもまた『オデュッセイア』第９巻で自分について μευ κλέος οὐρανὸν ἵκει《わたしの名声は「天」にも達している》と言う。《何によって？》δόλοισιν《策謀 doli によって》，すなわち，狡猾で人を罠にかける男としての名声によってであり，それから自慢たっぷりにイスマロス[の町]のキコニス人たちにおこなった破壊と強奪を物語るのである。(4) これは，略奪や殺人が，今でも戦争や征服や権謀術策がそうであるように，当時は栄光 gloria とされていたことを証明する。

【原注２】ヨーロッパでも，タキトゥスの『ゲルマーニアの習俗について』最終章の時代には，フィンランド人が同じ「状態 Stato」にあった。(5)

【原注３】アンデルソンの『アイスランドとグリーンランドの博物誌』(6)，モーペルテュイの『ラップランドへの旅』(7)，そして四折版のフランス語の『旅行記叢書 *Storia generale de' viaggi*』の第17巻(8)を読まれたい。前にも言及したが，『法と技芸と科学の歴史 *Storia delle leggi, delle arti e delle scienze*』(9)をここに付け加えてもよかろう。

【原注４】ホッテントット人の生活についてはコルブ(10)，ルイジアナ人についてはトンティ(11)，シベリアに関してはグメーリンの『旅行記』(12)を見よ。

Ⅱ．いくらか時が経つと，人々は安楽 comodi〈に気づき avvertire→〉を味わい aver gusto 始めるようになり，より多くの欲求をもつようになった。(13) そうしてより狡猾 scaltri になった。雌牛や羊や山羊，馬や駱駝などのいくつかの動物たちを家畜化し，群れにすることから多大な効用 utilità を引き出せるのではないかと考え，そのようにした**【原注１】**。人々は動物たちを，季節ごとに放牧の都合に合わせ，あちらこちらへと導いた。タタール人，アラブ人，アトラス山のムーア人，喜望峰の住人たちやアメリカの多くの地方 paesi の大部分は，今もやはりそのようにしている。これは世界の滅亡後の「諸民族」の第二の時代(13)といえよう。だが，土地の耕作はまだ非常に隷属的

servile と考えられていたのであって，上述の「狩猟」「漁猟」「牧畜」の三つの職業 professioni しか実行されていないところではどこでも，未だにそう見なされている。アフリカの国々では，人々が土地を耕作し始めるやいなや殺されてしまうところもある。今日のタタール人たちは，「南部 Mezzogiorno」のあたりでさえ，ペルシアやインドに対して同じように考えている。ギリシア人やラテン人たちのあいだでは，耕作の大部分は奴隷たちの仕事であったが【原注２】，それは今日のアメリカ植民地も同様である。しかしながら，注意すべきは，これらすべての国々では，人口がとても乏しくて少なく，人間的な生活よりも獣のそれに近いということである。

【原注１】北部のカナダ人は未だにどんな種類の家畜ももたない。ヘヌパンの第１巻[14]［を参照］。マダガスカルという大きな島では，動物の大部分はまだ野生の狩猟［対象］である。

【原注２】アリストテレスは『政治学』の第７巻で，よく形作られた「国家 Repubblica」においては，田園は奴隷によって耕作されるべきだと要求している。だが，それは南方の国々 paesi meridionali についてであって，θυμοίδεις《快活さや勇敢さ *spiritosi, coraggiosi*》に乏しいので，服従するのにより適しているのである[15]。実際，羊毛のような縮れ毛で膨れた唇の黒人種はアフリカに数多いのだが，彼らは知性 intelligenza が乏しく臆病 vili なので，思慮 raziocinio においては「猿たち Scimie」に，勇気 coraggio においては多くの野獣たちにかなり劣っているほどなのである。そしてこれこそ，どうしてどこでも大部分の女性たち donne の方が，我々の種において男性たち maschi よりも労苦 fatica に対して我慢強い sofferenti のかということの上手い理由 buona ragione である。

Ⅲ．あらゆる「民族」のうちで，家族の数と知識 sapienza と人間性 umanità と洗練 polizia を最も増進し，生活の便宜 comodi と快楽 piaceri をより増加

させたのは，人間生活の最初にして主要な支柱である土地の耕作 coltivazione に従事した「民族」である【原注１】。なぜなら，第一に，他のいかなる技芸も，耕作をおこなうにもまして〈多量→〉多数の人数を就業させ養うことはないのであり，したがって，大量の住民を維持するのに適したものはないからである。第二に，土地の耕作は他の多くの技芸を必要とし，それら自体が多くの家族を維持するのに役立つからである。第三に，人々は土地以外のいかなるものからも，我々の生活に最も適した果実や食物，最大の喜びを得られぬからである【原注２】。最後に，耕作には，上述の諸技芸よりももっと安定した多数の家族の結合が求められるからである。したがって，耕作は人々を同じパンを食べること compagnia［仲間づきあい］の喜びに慣れさせ，そこから民衆 popoli の知識 sapere と人間性が生じる。これは，「諸民族」の第三の時代[16]，安定した都市的「支配」Imperj civili の最初の基礎といえる。

【原注１】そしてここから，［農業の女神］ケレスはギリシア人たちによって θεσμοφόρος《法をもたらす *legifer*》と[形容]されたのである[17]。市民法 leggi civili は土地の分割 divisione delle terre とともに生まれ，土地[耕地]は農業とともに生まれたからである。

【原注２】ホメロスは見事きわまりない比喩で，パンを μυελὸν ἀνδρῶν《人間の髄 *midolla degli uomini*》と呼んでいる[18]。

Ⅳ．上に挙げた四つの技芸で自分たちの生活を支えていた最初の人間たちは，木や石やある種の動物たちの角や骨の他には，それらの技芸を営むための道具をもっていなかった。いまなおアフリカやアメリカには，旅行者たちが記述しているように，それらの技芸のために上述のような道具しか用いていない野蛮な「民族」Nazioni barbare がいくらかいる。我々がメキシコ人やペルー人を知ったときには，彼らのあいだに鉄の[使用の]痕跡は全く見られなかっ

たし，銅についても〈そう→〉ごく僅かであった。したがって，諸「民族」の初期においては，これらの技芸，とりわけ「農業」が，いかに困難であり，実り少ないものであったかが，容易に理解できよう【原注１】。

【原注１】しかしながら，我々はペルー人たちの「農業」と紡績や織布の技芸についてはガルシラーソ[19]から，そしてすべてが平行六面体の美しい石でできたクスコの雄壮な要塞や，巨大な木柱で豪壮な「神殿 Tempj」や「宮殿 Palagi」を建造するメキシコ人たちの技芸についてはソリス[20]から，たくさん聞かされている。「農業」はまだ新しく柔らかな土地でもなんとかできるだろう。だが，わたくしはこのメキシコの建造物については大いに疑念を抱いている。火と石だけでは下手な働きとなる。貴方たちは丸太は手に入れられよう。だが，よく削られた板やまっすぐな柱はどうか。樹木の根本の太さに，ちょっと怖じ気づかないか。クスコの要塞は石の積み重ねである。それは粗野さだけが目立つところでは，労苦 fatica と手仕事 opera の証し argomento である。

Ｖ．だが，人間生活の安楽 comodi［便宜］と「技芸 Arti」のために最も必要な金属である鉄が発見されると【原注１】，上述の最初の四つに劣らず有用な他の二つの人間の専業 applicazioni が生まれた。それは，金属を採掘する技芸である「冶金 Metallurgica」と，それに形を与えて道具を製作する「鍛冶 arti Fabbrili」であった[21]。率直なところ，あらゆる人間の発明のうちで，これこそが最も有用なものであった【原注２】。というのも，「農業」を完成し拡張しただけでなく，大地と海とが我々に提供する素材 materie を改良するあらゆる技芸の源となったからである。「諸民族」の最初の哲学者であり神学者であった古代の詩人たちは，その［技芸の］創始者 autore であったプロメテウスがユピテル［ゼウス］の息子のティタン神たちによってコーカサス山脈に縛りつけられたのは，こうした発明によってある程度人間たちを

神々に対等にしたためであろう【原注３】と書き記した。これこそ，「諸民族」の力と文化の増大の第四の最高の段階であった。

【原注１】鉄の以前には銅の使用があった。チリの人々には鉄がなかったが，銅の武器や道具はもっていた。ガルシラーソ・デ・ラ・ベーガ[を参照]。ホメロスでは，ほとんどすべての防御用の武器は銅製で，若干の攻撃用の武器でさえ銅製である。

【原注２】鉄と銅を真に有用な範囲内に留め，交互に破壊し合う道具とせぬような技芸が望ましかったであろう。だが，人間の諸情念 passioni umane が正義 giusto と高潔 honesto の気圏 atmosfera の外に跳び出すのを誰がとどめられようか？　常に論議されてきた問題であるが，まだ解決できていない。

【原注３】それとも，いかに容易く喉を掻き捌き，八つ裂きにし，細切れにするかを示すためだったのか？　ともあれアイスキュロスの『プロメテウス』を見よ。(22)

Ⅵ．上述の諸技芸が我々に〈用意する apprestano→〉提供する somministrano 素材の大部分は，我々にとって有用なものとなり，我々の安楽に役立つようになるには，様々に異なった変様 modificazioni を必要とする。この変様こそがまさに二次的な諸技芸 arti secondarie の対象であって，この諸技芸は新しい〈物体 cose や〉物質 sostanze を生産するものではないが，にもかかわらず一次的な生産物 produzioni primitive を改良して migliorando，我々の欲求 bisogni と快楽 piaceri にそれらを適合させて，人口の多い popolata 勤勉な industriosa「国民 Nazione」の維持と〈快楽 piaceri →〉活気 ricreazione と富とに真底から役立つのである。(23) 第一に，この諸技芸は，これなくしては政治体 corpo politico［国家］のうちに容易に居場所を見いだせないであろうような多数の家族に職を与えて養う。第二に，外国貿

易 commercio esterno に物資を提供する。外国貿易は，我々の余剰 soverchio によって我々に欠けているものを我々に獲得させるので，富の新たな源泉である。この諸技芸は，安楽 comodita［便宜品］の技芸と奢侈 lusso の技芸に分けられるが，これらについては後で詳しく語るだろう[24]。そしてこれが，その偉大さと完璧な文化へと向かう「諸民族」の第五の段階 grado である。

Ⅶ．ある「国家 Stato」において前述の諸技芸が満開になると，「国民 Nazione」を成長させ富ますために何よりも欠かせないのが，外国貿易にほかならない。これは人間の勤労の完成 compimento dell'industria umana であり，よく理解されて運営された governato ならば，財貨 beni の巨大な源泉である。第一に，多くの家族に職を与え，彼らにその「国民」のではなく外国人たちの出費によって生活の資を提供するからである。第二に，「国民」の余剰［な財貨］の排水路 scolo として役立つので，その分だけ一次的な諸技芸に対しても二次的な諸技芸に対しても励まし stimolo や促し sollecito として役立つ。それらの諸技芸は，この排水路なしでは衰弱してしまい，余剰を獲得する段階にも，その余剰の販売によって欠けているものを獲得する段階にも決して至らなかったであろう。商業は諸国民 popoli の文化と偉大さの第六の段階を構成する。

Ⅷ．人類 umanità［人間性］が絶頂に達したと言いうる最終段階とは，単に前述の諸技芸やそれらに付随して今日では220種近くに達している諸技芸[25]だけでなく，学芸 buone lettere や諸科学 scienze も同様に繁栄している段階である[26]。これらは人々の才知 ingeni umani を〈動かして muovono→〉養って nutriscono，その種皮 guscio を打ち破らせる sbocciare ようにするだけでなく，人々をより機敏で率直で偉大 destri, aperti e grandi にするので，人々を啓蒙して illuminano，これまで卑賤視されていた職種に対しても違った見

方をさせるのである【原注１】。付言すれば，この光明 lume は直接的にも間接的にも下層の民衆 popolo minuto のあいだに射し渡り，彼らのおこないのすべてに活気を与えるのである。いかなる国民 popolo といえども学芸と科学を大成せずしては技芸を完全たらしめることできなかったということ，また，学芸と科学が消え失せたところでは技芸もまた衰退し粗野きわまりないものとなったということは，過去のあらゆる世紀の経験であり，エジプトとギリシアがその大いなる実例である。そして当然ながら，この同じ才知の光明と活力が，アルキメデス，プラトン，ガリレオ，デカルト，ニュートンのような人々を生んだのであり，フェイディアス，アペッレス，ダ・ヴィンチ，ラファエッロ，ミケランジェロ，その他の偉大な芸術家を生んだのである。古代において，ペルシアの学芸の世紀は，キュロスの時代であった。ギリシア人たちの黄金の世紀は，アレクサンドロスの頃の時代に花開いた。エジプトではプトレマイオス朝の治下，ローマではアウグストゥスの頃，トスカーナでは偉大なるコジモ[・ディ・メディチ]の頃，フランスではルイ14世の治世が，そのような時代であった。同じことは他にもたくさん言えるだろう。ところで，こうした輝ける世紀のすべてにおいて，「科学 Scienze」と「技芸 Arti」は歩を等しくしたのである。前者が発達したとき，後者も一緒に発達し，前者が衰退すれば，後者も同様に衰退した【原注２】。それゆえ，「立法者 Legislatore」は，技芸の精神を普及・改良しようと望むのであれば，「科学」もまた保護しなければならない。だが，おわかりであろうが，わたくしが「科学」といっているのは，衒学的な精神でもなければ，抽象的で奇怪な観念の研究でもない。「自然」のうちに基礎をもたず，人間にとっての堅実な有用性を意図しないような研究はすべて，空しく有害な仕事である【原注３】。

【原注１】たとえ無知な者の目には卑しく見えようとも，しかしあらゆる技芸にはその諸原理があり，そして「哲学者」にしか気づかれない技巧

の極み meccanissimo がある。それゆえ，最も卑しい技芸の理論も科学にすることができる。[27] これは「計算 Calcolo」と理に適った「機械学」Meccanica ragionata の必要性を示している。

【原注２】諸科学と諸技芸の父である「天才 Genio」は，自由を，そして庇護 ale［翼］を必要とする。後者は報償 premio によって，前者は君主たち Sovrani の敬意と賞賛 stima e applauso によってもたらされる。だが，君主たちは……。『アグリコラ伝』のはじめのタキトゥスの格言を銘記すべきである。「高邁な精神は，いちばん生まれやすい時代においていっとう高く評価される Virtutes iisdem temporibus optime aestimantur, quibus facillime gignuntur.」。[28]

【原注３】ヴェルラム男爵[フランシス・ベーコン]は問うた，「修道士たちの学問は国家にどんな益があるのか cui bono Reipublicae studia Monachorum?」と。答えは，「子供の玩具は家さえも揺さぶらぬだろう Cui crepundia pueris ne domum turbent.」。[29]

訳注

（1） こうした表現はヴィーコの『新しい学』に由来する。例えば，その第１巻第２部「要素について」の公理42を見よう。

《ゼウスは雷光を発して巨人たちをうちのめす。そして，異教の諸国民は，いずれもが，それぞれのゼウスをもっていた。／この公理 Degnità は，かつて大地全体を覆う世界大洪水があったという，物語［神話伝説］によってわたしたちのもとにまで伝えられている自然史を含んでいる。／この同じ公理は，［……］そのようなきわめて長い歳月のあいだに，ノアの三人の息子たちの神を知らぬ子孫は野獣的状態に陥っていって，野獣的放浪を繰り返しつつ，大地の大森林の中をあちこちへと散らばっていったこと，そして，大洪水後はじめて天が雷光を発したときには，野獣的教育によって巨人になり替わっていたことを確定してくれるはずである》（上村忠男訳，法政大学出版局，第１分冊，2007年，141-142頁）。

ヴィーコによれば，天地創造から1656年後に「世界大洪水 Deluvio universale」が起こり，さらに百年以上経って大地が乾き「天が雷光を発したとき」に，神々への恐怖と畏敬によって宗教に目覚めた諸民族の歴史が始まったされる。したがって最初の第一の時代は「神々の時代 Età degli Dei」である。

なお，ジェノヴェージは『講義』第２巻第１章「あらゆる物および労働の価値と価格の，第一の起源と最初の物理的諸原因について *Della prima origine, e delle prime fisiche cagioni del valore, e del pregio delle cose, e delle fatiche tutte*」第５節の原注(a)で，《著名なるジャンバッティスタ・ヴィーコ》を《わたくしの旧師の一人であり，その『新しい学』によって不滅の名声をもつ人物》と呼んでいる。

（２） 自ずと連想されるのは，ジョン・ロックの『統治二論』後篇第５章の《たとえ，大地と，すべての下級の被造物とが万人の共有物であるとしても，人は誰でも，自分自身の身体に対する固有権(プロパティ)をもつ Though the Earth, and all inferior Creatures be common to all Men, yet every Man has a *Property* in his own *Person.*》（加藤節訳，岩波文庫，326頁）という一節であるが，『講義』でのロックへの明示的な言及（７箇所）は，その貨幣論（Giovanfrancesco Pagnini と Angelo Tavanti によってイタリア語に編訳された *Ragionamenti sopra la moneta, l'interesse del danaro, le finanze e il commercio, scritti e pubblicati in diverse occasioni dal signor Giovanni Locke, tradotti per la prima volta dall'inglese con varie annotazioni,* Firenze：Andrea Bonducci, 1751, 2 voll.）に限られている。拙稿「高貴な実学」（上）87頁注24でも弟子のガランティの証言を挙げたように，ジェノヴェージはロックの熱心な読者であったが，哲学者・政治理論家としてのロックを前面に押し出すことには慎重なように見受けられる。ただ，『ディチェオジーナ』第３巻第３章「父親の権力，父親としての権利と義務について *Della Patria potestà, e de' diritti, ed officj paterni*」の３節には，《父親はある時期には息子たちの君主 Sovrani であるとロックは言う。だが，ある時期にはその友人，そして非常に年老いるとその息子である》（*Della Diceosina…*, op. cit., p. 339）と記されている。校訂者は注で『統治二論』後篇第6章「父親の権力について」の参照を求めているが，この後半に該当する文言はロックには見当たらず，ジェノヴェージ流の諧謔であろう。しかし，これが少なくともジェノヴェージが『統治二論』を読んでいたことの傍証になるとすれば，《このように，最初の頃は，全世界がアメリカのような状態であった Thus in the beginning all the World was *America*》（同上訳，350頁）という名高い一文も，当然ジェノヴェージの知るところであったはずである。

（３）『政治学』第１巻第８章（1256a 30-b8）には次のような記述が見られる。《ところで，人間にしても事情は同様である。彼らの生活様式は非常に異なる。［……］また，ある者は狩猟で生計を立てる。狩猟といってもいろいろある。たとえば，ある者は略奪 ληστεία で，ある者は湖や沼地や河，あるいは適当な海岸のほとりに住んで漁(すなど)りで生計を立てる。［……］人間の生活様式にはだいたいこれだけのものがある。少なくとも，その生産行為が自力によっていて，交換や売買をつうじて食糧を調達することのないものは，ざっとこれだけ数えられる。すなわち，牧畜，農耕，略奪，漁，猟である》（牛田徳子訳，京都大学学術出版会，2001年，26-27頁）。

（４）『オデュッセイア』第５巻の最後でパイエケス人の国に漂着したオデュッセウスは，女神アテネの計らいで王女ナウシカアに助けられ，その父アルキアス王の宮殿に導かれるが，第９巻19-20行に至って漸く《わたしはラエルテスが一子，その

端倪すべからざる策謀のゆえにあまねく世に知られ，その名は天にも達するオデュッセウスです》（松平千秋訳，岩波文庫，上巻，219-220頁）と素性を明らかにする。そして39-61行では，《風はわたしをイリオスから運んで，キコネス族の町イスマロスへつけてくれた。ここでわたしは町を陥して男たちを殺し，女房たちや莫大な財物を町から捕獲し，誰にも不公平のないようにして，戦友たちに分配した》（同上，220頁）云々と物語る。

（5）《フェンニ族はあきれるほど野蛮であり，ぞっとするほど貧乏である。武具も馬も家もなく，草を食い毛皮を着て土に寝る。彼らのただ一つの希望は矢である。それも鉄がないために，骨で鏃をつくる。[……] しかし彼らは畠を耕すために呻吟したり，家を建てるために骨折り，あるいは自分の財産や人の財産を願望と不安のうちに取引するよりもこのほうが幸福だと考えている。彼らは人間に対して気を使わず神々にもわずらわされず，なんの願いも必要としないという最も難しい境地に達している》（國原吉之助訳『ゲルマニア アグリコラ』，ちくま学芸文庫，105-106頁）。もちろん，《ここにいうフェンニーを，直ちに今日のフィンランド人の祖先とは考えられない》（泉井久之助訳『ゲルマーニア』，岩波文庫，223頁訳注）。

（6） Anderson, Johann（1674-1743），*Histoire naturelle de l'Islande, du Groeland, du détroit de Davis et d'autres pays situés sous le Nord, traduite de l'allemand de M. Anderson, de l'Académie impériale, bourg-mestre en chef de la ville de Hambourg. Par M. * de l'Académie impériale et de la Société Royale de Londres,* Paris：Sébastien Jarry, 1750, vol. II, pp. 29-30, 168［Perna］.

（7） Moreau de Maupertuis, Pierre-Louis（1698-1759），*Relation d'un voyage fait au fond de la Laponie pour trouver un ancien monument*（*Oeuvres,* Lyon：J.-M. Bruyset, 1756, t. III, pp. 198-200）［Perna］.

（8） Prévost, Antoine-François（1697-1763），*Histoire générale des voyages ou nouvelle collection de toutes les relations de voyages par mer et par terre qui ont été publiés jusqu'à présent dans les differentes langues de toutes les nations connues*, Paris：Didot, vol. XI, 1753, Livre troisième. Voyages aux terres australes ou antartiques, pp. 199-262. 実際に第17巻に含まれているのは，*Suite de l'histoire générale des voyages... pour servir de supplément à l'édition de Paris,* Amsterdam：Arkstée, Merkus, 1761 だという［Perna］。

（9）『講義』第1巻第1章「政治体 corpi politici について」8節の原注(a)でも技芸と科学の歴史に関する《楽しく有益な dilettevole e utile》書物として推奨されている Goguet, Antoine-Yves（1716-1758），*De l'origine des lois, des arts et sciences et de leur progrès chez les anciens peuples,* Paris：Desaint et Saillant, 1758, 3 voll. を指す。同書は1761年にルッカの Vincenzo Giuntini 書店からイタリア語訳が刊行されている。

（10） Kolb, Peter（1675-1726），*Description du Cap de Bonne-Espérance, où l'on trouve tout ce qui concerne l'histoire naturelle du pays, la réligion, les moeurs et les usages des Hottentots et l'etablissement des Hollandois, tirée des mémoires de Mr. Pierre Kolbe, maître ès arts, dressés pendant un séjour de dix années dans cette colonie, où il avoit été envoyé*

pour faire des observations astronomiques et physiques, Amsterdam: Jean Catuffe, 1741.

(11) Tonti, Henri de (1649-1704), *Relation de la Louisianne, et du fleuve Missisippi, où l'on voit l'état de ce grand païs & les avantages qu'il peut produire &c.,* Amsterdam: Jean-Frédéric Bernard, 1720.

(12) Gmelin, Johann Georg(1709-1755), *Voyage en Sibérie contenant la description des moeurs et usages des peuples de ce pays, le cours des rivières considerables, la situation des chaînes de montagnes, des grandes foréts, des mines, avec tant de faits d'histoire naturelle qui sont particuliers à cette contrée, fait aux frais du gouvernement russe par M. Gmelin, professeur de chymie et de botanique. Traduction libre de l'original allemand par M. de Keralio,* Paris: Desaint, 1767, 2 voll.

(13) 周知のとおり『国富論』の冒頭でも《生活の必需品と便益品 necessaries and conveniences of life》こそ富であると強調されている。これに「奢侈品 luxury」を加えて，その是非を論じるのは，当時の経済文献に共通した発想であるが，ジェノヴェージでは，ここに《人間は，まずは必要なもの *necessario* を感じ取り，つぎに有益なもの *utile* に目を向け，つづいては便利なもの *comodo* を認知するようになり，さらに進むと快楽 *piacere* に興じ，それから贅沢 *lusso* に溺れ，最後には正気を失って財産を浪費してしまう *istrappazzar le sostanze*》(上村訳，154頁)というヴィーコ『新しい学』第1巻第2部の公理66が重ね合わされているように思われる。

(13) これもヴィーコ的な表現だが，『新しい学』では第二の時代とは「英雄たちの時代 Età degli Eroi」とされている。

(14) Hennepin, Louis (1626-1705), *Voyage, ou Nouvelle découverte d'un très grand pays dans l'Amérique, entre le Nouveau Mexique et la mer Glaciale,* Amsterdam: A. Braakman, 1704.

(15)『政治学』第7巻第9章の次のような箇所を念頭においたものであろう。

《もっとも優れた国制をもつ国家，そして条件的な意味においてではなく，無条件に正しい人々を擁する国家では，市民は職人の生も商人の生も送ってはならない－このような生は卑しく，徳と相反するものだから－。したがってまた，市民になろうとする者は農民であってはならない。なぜなら徳の形成のためにも，国事にかかわる実践のためにも閑暇が必要だからである。[……] また，農民が奴隷ないし非ギリシア人のペリオイコイでなければならないならば，財産はかの人びと[戦士の階層と「公共の利益について審議し，正しいことについて判断する人びとの階層」]に属するべきことは明白である》(1328b37-1329a26，牛田訳，366-368頁)。

また，これに先立つ第7巻第7章では「市民の自然的性質」について風土決定論的な議論も展開されている。

《寒冷地に住む諸民族，とくにヨーロッパ地方に住む諸民族は気概に富んでいるが，思考と技術は乏しいうらみがある。それゆえ彼らは民族のうちでも比較的自由でありつづける一方で，国家を組織できず，近隣の民族を支配することができない。他方アジア地方の諸民族は思考と技術の精神はあるけれども，気概に乏しい。それ

ゆえ彼らはつねに支配され，隷属化されている。しかし，ギリシア民族は，地理上両者の中間を占めているように，気質の上でも両者の要素－気概と思考－を分けもっている。それゆえ彼らは自由でありつづけ，もっともすぐれた国家組織のもとにあるのである》(1327b23-b30，牛田訳，361頁)。

拙稿「高貴な実学」でも縷説したとおり，「閑暇σχολή」(ラテン語 schola，英語 school の語源)を市民の要件とするような謬見こそ，ジェノヴェージにとってはヨーロッパの二千年来の宿痾であり，「怠惰 ozio」の批判・克服が生涯の課題となった。「教育 educazione」とは「人間」を育成する「真の農業 Vera Agricoltura」でなければならない。農業を卑賤視し，農民を奴隷と同列視するような言説は断じて看過しがたい。だが，『講義』第1巻第8章17節でも指弾されるように，《我らに土地を *dateci terre*》という農民たちの叫びにもかかわらず，土地の移転を禁じた「封建法 jus feudale」によって，《ありとあらゆる家族はたった二種類に，すなわち「君主 PRINCIPI」と「臣民 SUDDITI」，あるいは「主人 PADRONI」と「隷従者 SCHIAVI ADDITIZJ」に分けられている》のが《ヨーロッパ諸国の大部分》—とりわけナポリ王国—の現状である。

「怠惰」も「奴隷」もないギリシアを，「自由」で「平等」なヨーロッパの理念とするために，ジェノヴェージは，「思慮」の乏しいヨーロッパと「気概」に欠けるアジアとの中庸としてのギリシアに力点をおいたアリストテレスを曲解して，「思慮」と「気概」に溢れるヨーロッパと無知で無気力なアフリカとの差別に置換してしまったのではないか。

(16) 『新しい学』では第三の時代は「人間たちの時代 Età degli Uomini」であり，それ以後は，(ローマ帝国崩壊後のヨーロッパのような)「野蛮の再帰」もあるが，基本的には(神々→英雄→人間の)三つの時代が反復するとされている。

(17) 例えば，ヘロドトスの『歴史』第6巻134節には《「掟授(テスモポロス)けのデメテル」の社》(松平千秋訳，岩波文庫，中巻，278頁)とある。

(18) 『オデュッセイア』第2巻289-291行。《そして食糧を用意して，酒は壺に，また人間の髄ともいうべく，力の元となる大麦の粉は丈夫な革袋(かわぶくろ)にと，すべて器に納めておきなさい》(松平訳，上巻，48頁)。

(19) Garcilaso de la Vega (1539-1616), *Histoire des Yncas rois du Pérou, depuis le premier Ynca Manco Capac, fils du Soleil, jusqu'à Atahualpa dernier Ynca: où l'on voit leur établissement, leur religion, leurs loix, leurs conquetês, les merveilles du temple du Soleil et tout l'etat de ce gand empire avant que les Espagnols s'en rendissent maîtres. Traduite de l'espagnol de l'ynca Garcilasso de la Vega. On a joint à cette édition l'histoire de la conquête de la Floride par le même auteur. Avec figures dessinées par feu B. Picart, le romain,* Amsterdam: Jean-Frédéric Bernard, 1737.

(20) Solis y Ribadeneyra, Antonio de (1610-1686), *Istoria della conquista del Messico, della popolazione e de' progressi dell'America settentrionale conosciuta sotto il nome di Nuova Spagna; scritta in castigliano da D. Antonio de Solis segretario di Sua Maestà*

cattoolica e suo primo istoriografo dell'Indie e tradotta in toscano da un accademico della Crusca, Terza impressione veneta, Venezia: Andrea Poletti, 1733, pp. 234-236, 258, 263-268, 290-291 [Perna].

(21) このようにジェノヴェージでは「狩猟」「漁猟」「牧畜」「農業」に続く不可欠の技芸としての「冶金」の重要性が力説されているが，これはおそらく，《詩人にとっては，金と銀が，哲学者にとっては，鉄と小麦が，人間を文明化し，人類を堕落させたのである》(原好男訳，『ルソー選集6』，白水社，1986年，71頁)という『人間不平等論』(1755年)の著名な一節を意識してのことであろう。ここではルソーは名指しされていないが，直前の『講義』第1巻第6章「教育について」6節の原注(a)では，《[鉄製の?] 道具を欠いている野生人》は身体の働きだけですべてをこなすので《柔軟で頑健 pieghevoli e robuste》であるという『人間不平等論』の論旨を部分的には認めながらも，だからといって《より巧みにこなし，より善く生きていると主張するのは誤っている》と反駁している。また，ジェノヴェージの発展段階論の原型とみなされる『大ブリテン商業史』第1巻評註6でも，奢侈論に関連してマンデヴィルとルソーの名が対比的に挙げられ，マンデヴィルについては，その極論を全面的に承認することはできないと留保しつつも，国民から一切の奢侈を取り去るなら途方もない混乱と無秩序が生じ貧困に陥るであろうと基本的には同意しているが，ルソーに対しては，《フランスの異常な精神 bizzaro spirito francese》と呼んで，《今日の文明的な諸国民を根こそぎにして，我々を農業と軍事のみに，すなわち，太古の野蛮状態に導かんと欲している狂人で人類の敵》と真っ向から批判している (Genovesi, Antonio, *Scritti economici,* a cura di Maria Luisa Perna, Napoli: Istituto Italiana per gli Studi Filosofici, 1984, vol. I, p. 295)。

(22) 『縛られたプロメテウス』500-506行が念頭にあったものと思われる。《さて，大地の下に隠されていて人間たちに役立つもの，青銅，鉄，銀と金，これらをおれより先に見つけ出したと誰が言うであろうか，当然ながら誰も言わない，戯言(たわごと)を言いたいものは別だが。手短に一切をまとめてみるならば，こう心得ておくのだ，人間のもつ技術は，すべてプロメーテウスの授けたものと》(伊藤照夫訳，『ギリシア悲劇全集』第2巻，岩波書店，1991年，35-36頁)。ただし，《ユピテルの息子のティタン神たちによって》というのはジェノヴェージの記憶違いであろう。アイスキュロスの劇では，プロメテウスを縛りつけたのは鍛冶の神ヘーパイストスである。

(23) スミスの四段階論が「狩猟・採集」「牧畜」「農業」のいわば〈第一次産業〉の段階からいきなり〈第三次産業〉の「商業」段階に跳躍するのに対して，その前提となる〈第二次産業 arti secondarie〉の意義を強調するのもジェノヴェージの特徴であるが，その背景には，《フランス人・イングランド人・オランダ人はもちろんのこと，スウェーデン人やモスクワ人までもが，製造業 manifatture や商業 commercio において我々を凌駕しているではないか》(拙訳『アントニオ・ジェノヴェージ「商業汎論－商業についての一般的な論考－」(1757年)』，一橋大学社会科学古典資料センター Study Series No. 27, 1992年，39頁)というような南イタリア

経済の後進性の痛切な自覚があったと言えよう。なお，上の引用にも見られるように，この「商業汎論」を巻頭に据えた『大ブリテン商業史』や同時期の講義録草稿『商業原論 *Elementi del commercio*』ではジェノヴェージも「製造業 manifatture」という語を頻用しているが，『講義』ではこの語は「製造品」を指すようになり，原料品を生産する「狩猟」「漁猟」「牧畜」「農業」「冶金」の「五つの基本的技芸 arti fondamentali」（第１巻第８章）に対して，それらを加工する「改良的な諸技芸 Arti miglioratrici」（第１巻第９章）という総称が用いられるようになる。

(24) 『講義』第１巻第10章は「奢侈的技芸について」と題されている。ジェノヴェージの奢侈論については，さしあたり拙稿「18世紀ナポリ王国における「政治経済学」の形成―アントニオ・ジェノヴェージ「商業汎論」とその周辺―」，『三田学会雑誌』第79巻５号，1986年，同６号，1987年を参照されたい。

(25) 訳注21でも触れた『大ブリテン商業史』第１巻評註６では，《素朴な諸国民のあいだでは５つか６つを越えなかった技芸の数が［奢侈によって］200種にまで達している》として，《卓越した書物 libro eccellente》であるボワギルベール（1646-1714）の匿名著『フランス詳論』（Le Pesant de Boisguilbert, Pierre, *Le détail de la France sous le règne présent, augmenté en cette nouvelle édition de plusieurs mémoires et traitez sur la même matière,* s. l., 1707, 2 voll.）の参照が求められているのだが（*Scritti economici,* p. 294），なぜか『講義』では同著への言及はなくなり，諸技芸の数は220種と増大している。

(26) 「学芸」を人類史の最終段階とする先蹤もヴィーコであり，『新しい学』第１巻第２部の公理65では，《人間にかんすることがらの順序はつぎのように進行する。すなわち，最初には森 *selve* があり，つぎに小屋 *tuguri*，それから村 *villaggi*，つづいて都市 *città*，最後に学院［文化施設］*Accademia* である》（上村訳，153頁）とされている。だが，《ベネディクトゥス［バルーフ］・スピノザは国家 *Repubblica* をまるで商人たち *Mercadanti* からなる社会 *Società* であるかのように語っている》（同上，189頁）と断罪したヴィーコとは対照的に，ジェノヴェージは商業の科学としての経済学を「有用な学 scienze utili」の中心に据えたのである。

(27) 「テクノロジー」という術語の発案者として知られるヨハン・ベックマン（1739-1811）の『技術学入門』（*Anleitung zur Technologie: oder zur Kentniss der Handwerke, Fabriken und Manufacturen, vornehmlich derer, die mit der Landwirtschaft, Polizey und Cameralwissenschaft in nächster Verbindung stehn: nebst Beyträgen zur Kunstgeschilichte. Von Johann Beckmann ordentlichem Professor der Oekonomie in Göttingen,* Göttingen im Verlag der Wittwe Vandenhoeck, 1777）の「序論 Einleitung」の中扉の裏面には，この【原注１】から採られたエピグラムがイタリア語のまま次のように掲げられている。

《たとえ卑しくとも，あらゆる技芸にはその諸原理があり，そして哲学者にしか気づかれないメカニズムがある。それゆえ，最も卑しい技芸の理論も科学にすることができる。ジェノヴェージ師の『市民経済の講義』第１巻102頁　Ogn' arte per

vile che sia ha i suoi principi, e il suo meccanismo, che non può esser avvertito che dal filosofo. E quindi è che le teorie dell'arti le più vili, si possono ridurre a scienza. Lezioni d'economia civile dell' Ab. *Genovesi* I p. 102.》。

『講義』の反響の一端を伺わせる事例であるが，仔細に見るとやや気になる点もある。名詞化された最上級形容詞風で造語かも知れないナポリ版(初版と増補第二版)の《meccanissimo》が，流布版（＝ミラノ版）系統の《meccanismo》となっている。その一方で，増補第二版では《filosofo》が《Filosofo》と強調されている。知を愛する者は，見かけにとらわれず，卑近なものをこそ凝視しなければならないというジェノヴェージの思いは，現代の技術論に伝わっているのだろうか。

(28)　前掲，國原訳『ゲルマニア アグリコラ』，114頁。なお，こうしたジェノヴェージの「報償」論は，その弟子のジャチント・ドラゴネッティ（Giacinto Dragonetti, 1738-1818）の匿名著『徳と報償』（*Delle Virtù e delle Premj*, Napoli: G. Gravier, 1766）で主題的に展開される。同書は，1764年に刊行されたベッカリーアの『犯罪と刑罰』と相補的に読まれて版を重ね，仏訳（1767年）や英訳（1769年）も出版された。最近では行動経済学やゲーム論の視点からジェノヴェージに始まる《Neapolitan Tradition of Civil Economy》の再評価に意欲的なブルーニ（Luigino Bruni）が，*The Genesis and Ethos of the Market,* New York: Palgrave Macmillan, 2012 の第 9 章 Virtues and Awards で注目している。

(29)　出典は残念ながら未詳であり，識者のご示教を待ちたい。ただ，このベーコンの名言らしきものは，18世紀イタリアの代表的な歴史書の一つであるカルロ・デニーナ（1731-1812）の『イタリアの転変』（1768-72年刊）などでも，典拠は明示されぬまま引用されている（Denina, Carlo, *Delle rivoluzioni d'Italia,* Padova: Minerva, 1822, vol. 2, p. 445）。